ルヴァン便り No.9
2017.6

同時代に生きた芸術家 「ル・コルビュジェと西村伊作」

坂倉準三へのつながり

オマージュ　ル・コルビュジエ「直角の詩」による坂倉ユリ制作タピストリー

Relationship with Junzo Sakakura　Tapestry by Yuri Sakakura of "Le Poeme de l'Angle Droit"

西村 伊作

ル・コルビュジエ

上野の国立西洋美術館が昨年「ル・コルビュジエの建築作品－近代建築運動への顕著な貢献」の一つとして世界遺産に登録されました。ルヴァン美術館ではこの機会に同時代に生きたル・コルビュジエ（1887～1965）と西村伊作（1884～1963）の二人を紹介致します。
生涯にわたり建築や絵画などの活動に打ち込んだ二人の生き方には、西欧と東洋を超えた「自然と人間への愛情」が感じられます。また作品とともに当時の社会へ発信したメッセージの多くにも共通した想いが見えてきます。
ともに建築の専門教育を受けることなく、時代の精神を先取りした建築作品を世に送り出しました。
画家としてもコルビュジエは晩年まで毎朝キャンバスに向かっていました。彼は「自分の建築は絵画という運河を通ってきた」と自身における絵画の重要性を述べています。
一方伊作は「芸術を生活として」自由奔放に建築、絵画、陶芸の制作に没頭しました。
今回の展示は、伊作は彼が最も情熱を注いだ大正初期の建築、絵画を中心にした作品、コルビュジエは世界遺産の7か国、17の建築作品と、彼の弟子の坂倉準三に贈られた絵画及び、準三の妻ユリ（西村伊作次女）によるコルビュジエ詩画集「直角の詩」のタピストリーの作品を展示します。
同時にル・コルビュジエと深くかかわり、日本との懸け橋となった坂倉準三の建築作品も紹介致します。
この企画展を通して、同時代に生きた二人の芸術家西村伊作とル・コルビュジエ、その志を受け継いだ建築家坂倉準三の情熱を感じて頂ければ幸いです。

サヴォア邸（フランス）
© 西森秀一

レマン湖畔の母の家（スイス）
© 西森秀一

クルチェット邸（アルゼンチン）
© Olivier Martin-Gambier

チャンディガール（インド）
© 山名善之研究室

国立西洋美術館（日本）
© 国立西洋美術館

A1

B2

B3

B4

D3

F3

佐藤春夫と西村伊作

辻本雄一
（佐藤春夫記念館 館長）

10年ほど前の2007(平成19)年、佐藤春夫記念館と西村記念館とで、「佐藤春夫と西村伊作」展を企画し、熊野新宮であればこそということで、両館を結ぶかたちで、絵画などでのふたりの共通の世界を少しでも理解できないか、さらにはふたりを巡る人々への目配りもこころがけ、ゆかりの地やゆかりの作品を散策できるような案内も徹底させる地図を作って企画展を開きました。副題には「自由人として、夢想しつつ、分析しつつ、理想に向かって」と掲げました。熊野新宮の地で生を享けたふたりですが、春夫に取って8歳年上の「伊作さん」は、中学校在学時代から身近に接して、いろいろと吸収した「隣人」でした。記念講演に駈けつけていただいた作家の辻原登さんは、「兄伊作・弟春夫」と題して話してくれました。

西村伊作は1921年東京駿河台に文化学院を開校しますが、惜しみなく協力したのが与謝野寛・晶子夫妻などでしたが、夫妻は春夫にとっては尊い恩師でもありました。
春夫の代表作である「美しき町」をはじめ、春夫には伊作をモデルとしている作品がいくつかあり、また、伊作も「初めての小説」という、おそらく伊作の唯一の小説作品では、春夫から創作の方法を教わるという話が記述されています。その舞台は、いまの西村記念館の応接間兼居間です。さらに、この応接間兼居間では、春夫をはじめ多くの芸術家が談論風発して刺激しあい、イタリアのカルロ・コッローディ原作の「ピノッキオ」が、この新宮の地で伝播、醸成されてゆくのです。

新宮市の速玉大社境内にある佐藤春夫記念館は、東京文京区にあった春夫の自宅を移築して小さな文学館として開館したものですが、まもなく開館30年を迎えます。その設計は西村伊作の弟大石七分によって成されたもので、昨年設計図が見つかりました。その大石七分をモデルにした春夫の小説が「F・O・U」です。漂泊の風船画伯と呼ばれた谷中安規が挿絵を描いた「絵本FOU」は、その造本で話題を集めました。春夫はその本のはじめで「谷中は僕のカンナ屑を化して花びらにし、僕の小石を拾ってパンにしたー」と述べています。

春夫は晩年近くの文章「わが伊作さん」で、「この人はまことに楽しく上手に語る人で、特にその身の上話が面白いが、広島の中学校で制服というバカゲたものにあいそをつかしアメリカへ渡って勉強することを思い立って、アメリカへ行ったらアメリカ人が「お前は何者か、クリスチャンか、ナショナリストか、ソシアリストか」などと問うから一語「自由思想家さ（オンリー・フリー・シンカー）」と答えてやったというが、この一語こそ彼の自画像の最も簡略に正確な素描であろう。」と語っています。春夫作品を通して、伊作や七分の姿を垣間見ることも興味深いことです。

「我に益あり」出版記念会
春夫（左）と伊作　1960.10

伊作の欧米旅行日記（8）

1909(明治42)年5月17日～22日　ロンドンにて

西村伊作は、明治42（1909）年3月27日、25歳の時、ドイツの商船に乗船し横浜から欧州旅立った。船はマラッカ海峡、スエズ運河を通り、ナポリに到着。その後は陸路をイタリア、スイス、フランスを経由しロンドンに到着した。
彼の旅行目的は、表面的には米国留学中で病を得た弟真子を迎えに行くことであったが、米国と英国を自分の目で見たいということも大きな目的であったのではないか。米国は伊作が大きな影響を受けた叔父大石誠之助が留学していた国であり、英国の近代住宅建築を伊作は好んだことからもそのことは想像がつく。
ロンドンでは、著名な観光地を見物すると共に、当時一般の旅行者は行かなかったであろうイーストエンドなどの下町にも足を延ばしているのが興味深い。また、美術館・博物館で著名な絵画を鑑賞し、特にコンステーブル[1)]に注目している。その作風は伊作の初期の水彩等に影響を与えたのではないか。その他レイノルズ[2)]、やターナーの絵が印象深かったようである。なお、日記原文は走り書きに近く、読みづらい部分が多々あり、解読が困難な部分は○を記し空欄としている。文中の句読点は西山が挿入したものである。ご了解いただきたい。

1)　ライオネル・コンステーブルLionel-Constable(1776～1837)　英国の風景画家
2)　ジョシュア・レイノルズ Joshua Reynolds(1723～1792)　英国ロココ期の肖像画家

●1909(明治42)年5月17日

朝、銀行へ行つて金をとつて、それからホテルの拂をなし汽車にのつてロンドンへ向ふ（ひる十二時）夕七時半頃ロンドンへ着、小さな宿へ入つて小さなあまり立派でない室で心棒してねた。

●5月18日

朝から下宿を探して見たが良いのが見付からぬ故、もう下宿へ行かぬ事としてトランタースホテルと云う下宿的のホテルへとまつた。あまり立派でないがすこしやすい。そして、しづかである。足のきづを洗ふたら熱が出た故、外へ出ずに宿に居る。雨が少し朝からふつて居る。薬局へ行つたら番頭が私をつかまえて色々はなしかけ帰ろうとしても、まあまあと云ふてかへさぬ。私が英語をよく話すと云ふてあきれて居た。初めて日本から来たと云ふたら、なほびつくりして居た。

●5月19日

夕べは寝臺のふとんがわるい為、よくねられなんだ。朝ロンドンタワーを見る。そしてタワーブリッジを見た。船が下を通る度にガランガランとベルをならす。往来が止るとゴロゴロと音がして橋はしずかに両方へはね上がる。船が通つてしまうと又ゴロゴロとなつて両方から下りて来て真中で会ふ。そうすると両方にまつて居た車が一時にかけだす。見て居ると実に面白い。橋の両側に塔があつてそこをのぼつて行くと、上にまた二本の橋がある。丁度ステーションの橋の様なのである。それからイーストエンドの貧民の多い所へ行つて見た。是もタワーの辺も一面に貧民がうろうろして居る。
それから電車でブリチッシュ ミューゼアムへかけつけ、すらすらつと一通り見（ここには○○が響く計り多くある）。また、乗合自動車でハイドパークへ行き公園を馬車で横切りサウスケンシントンミューゼアムを見た。
そこには水さい画が多くある。コンステーブルのが一番見る可きものである。それから乗合ロンドンのタワーブリッジでチャーリングクロスと云う一番にぎやかな所へ来て町をうろつき、自動器械で○をしたり、写真を見せたりするやつを見たりしてうろついて居ると、若い男と話しをし、彼は直ちに酒屋へ入つて何かのみ、ホテルのよいのを教へてやる云ふて川向へ私をつれて行き、音楽会の切符だと云ふてあやしい印刷物を売付け、しまいに酒を買へと云ふ。彼に大分困らされたあげく又乗合で宿に帰つた。

ロンドンのタワーブリッジ

●5月20日

又宿をかえて今度はウオーターロー橋の南へ○つた。これも小さいやすい宿だが室がよい。
Royal Society of Watercolour Painting を見た。
日本領事館で七分からの手紙を受取つた。
テート ガラリーを見た。
Aenated Bread Co.と云うのが多く町にある。そこでは安くものを食わせる。配達の子供の帽子の横の方へくつ付けた様なのは面白い。

●5月21日
ローヤル アカデミーを見た。其外に何も見ず。

●5月22日
朝、青物市場を見た。花の美しいのいちごや○○の綺麗な大きいのを見てよだれが出た。
ナショナル ガラリーを見た。ターナーの画が一番多い。中に水彩で面白いのがあつた。レイノールドの画も多くあつた。コンステーブルのもあつた。其外色々。
ホワイトシチ―と云う博覧会を見た。まだ出品が揃えて居らず建物計りだ。中で綺麗なこつた建物であつた。
水晶宮へ行つた。きたない所であつた。但し庭は綺麗見はらしのよい所だ。色々の見せもの、子供だまし、食べもの、ごちやごちやとのぼせるやう。
夜シバイを見た。小さな上品な小屋で、米国の世状であつた。言葉があまり分からんので筋が分からぬ。

（西山修司）

2017年度　ルヴァン美術館のご案内

6月10日（土）～11月5日（日）１０:００～１７:００
水曜日休館（7月15日～9月15日は無休）

フラワーアレンジメント体験教室

10:00～16:00　　講師：捧泉美（1,000円）　　7月30日（日）

夏休み体験木工教室

10:00～16:00　　8月10日（木）～13日（日）
講師：永島秀之　材料費込：1,000 円

ルヴァン　サマーコンサート

① 日渡奈那（Guitar）/ 高橋明日香（Recorder）　デュオコンサート　　7月22日（土）
② 近藤和花　ピアノコンサート　　8月6日（日）
③ ボサノバ／サバトス（木村 純・三四郎）　　8月12日（土）
④ 純名里沙（Vocal）with　林正樹（Piano）夏の日のコンサート　　8月20日（日）
⑤「一噌幸弘　和の笛・洋の笛・音楽の旅」　　8月26日（土）
一噌幸弘(能管・笛)／高木潤一(ギター)／勝海登(シテ方)／吉見征樹(タブラ)
①② は開場：17時、開演：17時半
③は開場：18時、開演：18時半
④⑤は開場：16時半、開演：17時　※④のみ入場料4,000円（前売り）　4,500円（当日売り）
①②⑤は軽井沢ペット福祉協会のチャリティーコンサートとして、一部を協会に寄付致します。
入場料：3,000円（中学生以下 1,500円）

秋のアートフェスティバル

10:00 ～ 17:00　美術館入場無料　　10月8日（日）
＊ルヴァン美術館の庭でのスケッチ大会
＊トールペイント体験教室／中嶋祐子　L' Atelier Fleur（1,000 円）

トークショー

14:00 ～（要入館料）　藤木忠善／建築家・元坂倉準三建築研究所　　7月30日（日）・10月8日（日）

軽井沢　建築ツアー「坂倉準三建築ツアー軽井沢」　　10月8日（日）

10:00 ～ 17:00　美術館入場無料（参加費：1,500円　申し込みは9月20日迄）
・飯箸邸　(現『ドメイヌドゥ　ミクニ』) - 追分
・A 型ハウス -　旧軽井沢　解説：北村紀史 / 建築家・元坂倉建築研究所
・ルヴァン美術館の企画展見学 - 南軽井沢　解説：藤木忠善 / 建築家・元坂倉準三建築研究所

☆カフェテラス Cafe Le Vent、ミュージアムショップ Le Ventは、常時ご利用いただけます。

ルヴァン美術館：〒389-0111　長野県北佐久郡軽井沢957-10　Tel. : 0267-46-1911　Fax. : 0267-46-1910
東京事務所：〒107-0052　港区赤坂9-6-14　Tel. & Fax. : 03-3401-8896　http://www.levent.or.jp